

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

2020 年 4 月 7 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 藤 洋 作 様

所 属 部 局 総合生存学館

職 名 特定准教授

氏 名 篠原 雅武

助 成 の 種 類	令和元年度・研究活動推進助成		
申請時の科研費 研究課題名	人新世的状況における空間哲学の構想:「人間の条件」の新地平		
上記以外で助成金 を充当した 研究内容			
助成金充当に関 わる共同研究者	(所属・職名・氏名)		
発表学会文献等	(この研究成果を発表した学会・文献等) Masatake Shinohara, Rethinking the Human Condition in an Era of the ecological collapse, CR: The New Centennial Review 2020(Under consideration)		
成果の概要	研究内容・研究成果・今後の見通しなどについて、簡略に、A4版・和文で作成し、添付して下さい。(タイトルは「成果の概要／報告者名」)		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	1,000,000 円	
	使用した助成金額	1,000,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
		費 目	金 額
		書籍	253,394
		国内交通費	139,500
		英文校正	50,466
		国外交通費(使用見込み)	300,000
	書籍(使用見込み)	176,640	
	プリンター(使用見込み)	50,000	
	英文校正(使用見込み)	30,000	
当財団の助成に ついて	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)		

## 研究内容

人新世・環境危機の状況における人間の条件についての哲学的考察。20世紀なかば以後の西洋哲学の成果（ハンナ・アーレント、ジル・ドゥルーズ、ティモシー・モートン、デベッシュ・チャクラバルティ）の文献読解の成果をベースにしつつ、建築家や都市プランナーとの対話、実地調査、さらには演劇や音楽を始めとする、空間性のあるアートの実地見学・インタビューを交錯させることで、思想的なもの実践的なものを連関させつつ、人新世における人間の条件についての哲学的考察を行った。

## 研究成果

2019年度は主として単著（講談社選書メチエ。2020年内に刊行予定）の執筆を行った。テーマは人新世の哲学の続編であり、現代哲学の動向の紹介と解釈、人新世における新しい哲学的課題の明確化を課題とする。年度内には最終稿を完成させ、年内の早い時期（遅くとも夏には）には刊行予定である。また、執筆のために、建築・アート作品の調査活動を行い、建築家の能作文徳氏とのディスカッションを継続している。

これとの関連で、2019年5月に開幕したヴェネチア・ビエンナーレ美術展日本館（「宇宙の卵」）関連の仕事をおこなった。一つは、キュレーターである服部浩之氏への助言である（ビエンナーレに合わせて刊行されたカタログ所収の服部が書いたエッセーで詳細が書かれているが、主として「新しいエコロジー思想」と「共存」の思想を展示にいかにかかすかをめぐるアドバイスである）。もう一つは、2020年4月にビエンナーレの帰国展（@アーティゾン美術館）のために刊行される書籍に収録される能作文徳氏（建築家だが、今回の美術展のための会場構成をつとめ、一作家として参加した）との対談原稿である。能作とは2016年のヴェネチア・ビエンナーレ建築展（審査委員特別賞受賞）で私が制作委員として関わって以来の仲であるため、今回間接的に美術展に関わることができた。

## 今後の見通し

昨年度提出した科研費基盤 C の研究が採択されたので、引き続き、「人新世の哲学」にかかわる研究を行う。

なお、当初の予定では、2020 年 2 月か 3 月に研究調査でアメリカに渡航（人新世の哲学に関する情報収集、ライス大学のティモシー・モートン氏との意見交換）する予定だったがコロナウィルスの影響でそれができなくなるという「やむを得ない」事情が発生し、助成金のすべてを使うことができなかった。そのため、「助成金の一部」を、採択年度を越えて使用することになるが、その際は、コロナウィルスの収束状況を見計らい、当初予定した研究旅行のため、本助成金の残高を使うことにする。